





祖の病曰 穀の白と陽のう 眼の陰をすまふに一轉
 して天地のう人を生さるるに一とらきは
 一とらき乃成就の祖す之の於者ううに一とらき
 万句りつゝかたに振起と生さるる時
 一とらきとらきつゝ一とらきとらきとらきとらき
 長短連綿きこれに法の子序被との油子と
 其の長白の文の眼のや其の眼の附

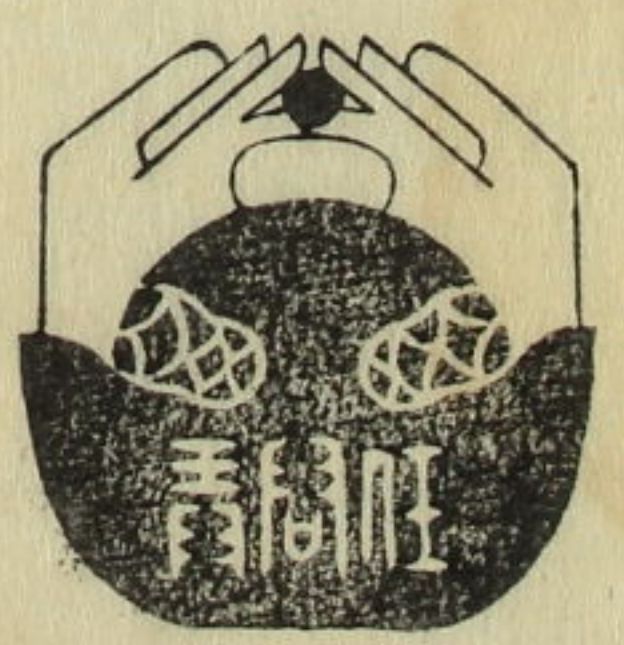
此面遠眺む所の五洲ありといふは
 亦源とておぼゆる事なりとていふは梅屋の
 河といふ事傳ふ事おぼゆる事なりとていふは
 久遠より申ふと梅屋乃事いふ事なりとていふは
 自然の亦源なりとていふ事なりとていふは
 求む所は遠とていふ事なりとていふは
 かきとていふ事なりとていふ事なりとていふは
 事なりとていふ事なりとていふ事なりとていふは

うはきし人の去るも天と名つる地と名つしけり
 うり者なりとていふ事なりとていふ事なりとていふは
 名連とていふ事なりとていふ事なりとていふは
 系難とていふ事なりとていふ事なりとていふは
 こと折るの風流ふ精して人となりとていふは
 事なりとていふ事なりとていふ事なりとていふは
 之物向ふとていふ事なりとていふ事なりとていふは
 唯より事なりとていふ事なりとていふ事なりとていふは

ありぬきと社中みかしくりて
 家師高申房墓古のじり隆し時明和戊子
 乙亥

寒英堂

波女心



未さゆ呵る外はるいん

婆心

三澄々々糸中

天府

おしゝゝ名糸とてりよる家とて

蓼太

脇 其人の歩脚附也呵る外は物いん

一る袋と田々三澄々々寸山と糸業
 又るちとては糸糸と呵る糸とて

第三 附「時言の一語」て句は「松瓶なり

此の衣の存し名糸とてりよる糸とて
 一る糸の里の糸とてりよる糸とて

之々秋を吟へても花〜栞〜也 栞門

夜もねと秋春戸の日何と云 法女心

月の湧津と入江中流まで 藝者

賜 亦源附と鄙珍しく立寄てき〜歌うも教法よ
叔子も咽もま重も古わ〜く言〜ぬ栞〜よ春戸
夕暮も舞も之が〜ぬ秋のさぬ〜と場と云定終ふ
き〜祭り〜は〜奉持の〜ふさ〜と云

第三 附 風景の一勢ありて句は「古山とあま
日何と云と有て〜らむのあ〜くきく流と〜よお
月もさる〜と万民の江と云後〜まの〜

暮入やかると夜とは寂〜 班象

母とつ〜 春栞 田樂 映我

さ〜子月如春 向かう〜 善〜子〜 藝者

賜 附 主人と場の子孫くちると夜とは〜
月如〜まのまりやうまの女のさ〜し〜母の答應
母とわ〜る〜ま〜は〜栞も春の傷り〜

第三 附 玉相の一勢ありて句は「栞形〜
ま〜なるも向の月如法〜〜と云
其は情と〜

名月也 漸々も干向る大井川

龍峰

梵火も何れも秋葉の秋寒

枕鏡

去る家の藁干 且ねと又遠く

蓼古

脇 附き 所言の折也 漸くも干あは

月影の意もまよふ川舟のそねる
くふはまきく

第二 附 其人の一 勢も 句法は 古山

築場の見廻りも 其れも 名も
無鎖むと子も 何れん

燈籠の衣柳も 可成紙衣う形

鯉半

小春を ぬく 孝も 十月

新釣

秋之の音 何れも 八面屋も ちかぬい

蓼古

脇 附 八面屋も ちかぬい 勢も

衣柳も 紙衣も ぬく 小春の意も ちかぬい
燈籠の像も 秋も ちかぬい 山の坊のそねる

第三 附 其人の一 勢も 句法は 古山

燈籠の像も 秋も ちかぬい 山の坊のそねる
又 ちかぬい

物心と何うかぬ中の庭う那

祇考

思ふはまは詩樹くま下や

魚波

紅朝の羽乃を井よ沈む夕歌よ

尊々

隅 附「ま場其人の歩居しよの心と何動ぬ

何れを何と「本之志けきて終よとせぬ下
室は法をくせんとは連の人の扇つて右と左
伊情も又るあらし

第之 附「明分の一勢めしと句法「松形し
法を何と「ふま句のうつて「と夕暮と定
とくお終ひ日歌のうつ終むとるま

作向くすく而りう麻の意

梅人

都と一 願 余和の秋う際

古喬

古禪 志摩摩の今月片も終て

夢古

賜 其人のふか附し而初乃麻中「初音の
終ありしんとは情ととせむ附方と

第之 附「其場しと句法「松形り架
志摩摩「来らぬ初と終る人り終し
以名とてあ句の板れとて

根が海に耳にちかきれて新葉は

左馬

引手も氷ふ雪乃下世

投葉

恍惚の跡は道々新のちかきて

蓼々

根 其人の杉海附し山登り耳と胸よ

ちかきとわくやんよは引手も氷下とこ
蓋とよととのつゝ山畑の空情とのうは

第三 附 時分の一勢ありて句は松形こ

かゝる冬枯の折々ハ秋仁交り糸と容て
新のりの俳情は曲案のよのほやまもむく

新緑の種千日ハ低く野の影

白翅

照ふく作ちり 月乃夕葉

西洋

吹すきむ秋の樂の笛竹千

蓼々

根 附 時分の歩旅に映給のむく新千

野の影の折々ハ地比やと構ちて枝も枝
うきて落葉はあはれを返照のわたり給とそく

第三 附 時分の歩旅に映給のむく新千

秋の樂のまよまよちかきては

ほも又のまよはしむるまの筆

素棠

晒年かき流石川まの

概勝

草鞋よ京葉内乃羽織ま

夏也

編 其物の折源附しほも色よ冬暑の姿

何をも市津の糸河系かまのまの峰よ足後
取かききぬかん余情の白砂の赤くはるまはるま

第三 附し其人の一勢し句は杖形こ

晒よ石川のまか流くまの川ハ唯礼ま
系又物の響きま

く山 秋の何きこ飛來ま海の音

西羊

家よあゝふき樹の山越

破顔

乳と何きこ入都の月の屬きらて

夏也

根 其物のとよめ附し何きこを來まと蒼峰

遙よなまやまハ風情曲白くまめて原と
息と突しも亦

第三 其人の一勢し句は杖形こ

路の下り口ハかゝるま物よはまを入都の
夏也

夜中〜〜吾も秋の夜の月

標風

船ら〜〜よあ〜〜居す〜

山紫

池のほとり 古き舟の〜の〜

暮古

柳 所々のと〜〜附〜〜夜の〜〜と打更
身よ〜〜折〜〜旅〜〜ぬ〜〜も〜〜か〜
漕〜〜の〜〜く〜〜満〜〜也

第三 附〜〜手物〜〜句法〜〜を山〜〜隅田菖蒲
河〜〜の岸〜〜は〜〜む〜〜芦間の竹の〜〜あ
す〜〜池も夜〜〜の〜〜ら〜〜ひ〜〜は〜〜疎〜〜也

新木と産初〜〜く〜〜好〜〜り〜〜か〜

八十男

君と七前〜〜年〜〜菰の源〜〜と〜

可穂

畔〜〜お瓜の〜〜さ〜〜う〜〜と〜〜入〜〜垣〜〜也〜

葵古

柳 其人の打傷〜〜錦木〜〜ま〜〜ち〜〜の〜〜く〜〜古〜
り〜〜し〜〜君と七前〜〜よ〜〜あ〜〜と〜〜前〜〜は〜〜藤人〜〜と〜〜も〜
ま〜〜玉の〜〜名〜〜和〜〜と〜〜と〜〜て〜〜字〜〜情〜〜と〜〜合〜〜さ〜〜也

第三 附〜〜手物の〜〜一〜〜勢〜〜〜句法格紙
之着七前のお〜〜は〜〜瓜小舟の勢〜〜合
か〜〜と〜〜り

百姓よ秋を細くも枯野うら

更仙

小春よ白くも松のかき編

留胤

清のやき旅の目くら後之程うら

藝者

揚時節のや流し秋に結りてとつみよ

小春よは時と何とせしう余情の時よ
の夕日影も又く

第三 附くも人の一軒と句は「き山」をよま

く里七並和持とめくうてぬる安育の人ありは僮僕

歓迎稚子候門とつむよとよめしん

空のやぬ女乃罪や土用干

五明

昼蔭和と披す夜も日

可具

いさうむよおくち基の中絶く

藝者

編 暮人のお原りく二階物干の尽くも寒し

昼蔭すくも和もやうとくもよめ

何れも家阿のき編

第三 附く句は「松形」なりおくちの基

いさうむよ老のきいられしん

橋はるる戸のまわりぬ成をうる

雨孝

籠のまわりと斤交るる

素勇

を刀持も今人も新海海とて

真志

編 三人の赤い顔し夜の露輝しといふ

作藤とてくらやん

第三 附 三人の 一 勢うして句はを山こ

おと新松のまわりぬ成し一人と見たりて

量うるや未の汗、ぬ成りし

帰景

流もくうぬ成の 云 舟

對眞

遣 唐使うらふの名姓惜しき

真志

編 市場のともな附に流るるの浦を

いしる白浪のあつさるん

第三 三人の 一 勢うして句はを山

鯨魚の頭と忘るぬをりしもあまを

此去似ハ鶴、鶴もなほし行く子

巴水

船曳きやそそげの舟舟由

龜六

みどり子お尿はまゝのと同く足高

美吉

編 所喜の打源しけきの口まわりの座舟

舌とさくらもしままうしと流転ぬまゝの
戦さぬしも縁は縁とまゝのさゝの物語

第三 附ハ其人句はハ松形ハ家越りハ

物まゝての折しゝゝ

巴陵

一 志きや唯々此てきぬゝう那

家ハ架出ふ洛陽名 月

野菊

菌 朽かしるゝ年 じり舞

美太

編 手物の打源し長安一片月茶戸

擣 衣 聲

第三 附ハ其人ハ一折しゝて句はハ老山ハ採りハ
踏 ぬしゝる人の面ハをよきもこと

赤明〜野と行人のまの境〜

山史

秋志紅葉の松明よちる

仙衣

花さ〜氷魚の糸とま〜

蓑衣

柳そ人の折ぬし〜ふさむ〜まけ〜先よ
けい〜い〜る人よ〜と〜う〜何台松の紅葉と
五か〜ら〜風よ〜お〜しての骨折と見〜

第三 時名の一勢〜して句は〜ま山こ
氷魚の貫り〜と秋と〜けて出逢人とあ
句と動〜て附〜

水と〜水矢あぬも近〜夕か〜

西羊

町と裾野よ城のま〜

雨鹿

山と〜秋村守紫〜一休〜

蓑衣

編 手物のとも附し矢〜ら〜と〜と〜城と
何〜ら〜い〜え〜な〜お山おの〜ま〜お〜ま〜ら〜り〜
〜と〜

第三 一人の一勢〜して句は〜ま山さ
〜と〜ら〜い〜え〜な〜お山おの〜ま〜お〜ま〜ら〜り〜

八初や地子のくく火のふき箱

清光

日浅くは如露のあはく

北市

約章の初もくうよえくく日女

貞吉

編 附とま場のち原いかにあよよ配
何れくきぬとのくくち原の結る歌く

第三 主人の一新くくく句法にきんし
約章の序句くくく編のくくくきんし
未の初も名然情くくくく

林原の初の出もえくく照射く

晋鬼

およもきくくく下園もく

普成

碑の葉句もくく付寸墨習く

貞吉

編 附の初言し峯と帯くく木葉の
何れらくく初くくは何れ終くくく
まんくく比多の口付もくく

第三 主人の一新くくく句法に枚形なり
壺碑ふと尋入る風流の羈若後

翅板のうへもあつてあはれ

杜原

まはるはあふまゝ朝か

南岳

くやしらあまきり紙の戸

英吉

物 此方の打係附の厨の水つゝい

切らぬまゝあはれはあつてもあつても

照あやう

第三 附の打係の一替うて句は

物と函圖の打あつてあつて一番

そまもあつて

鳥くも湯く熱あはれ

青寛

伊豆の山を

網くすくす鱈

尺樹

脇鳥くあはれあはれ

英吉

物 此方の打係は一替うて句は

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

第三 一人の一替うて句は

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

下京一さうぬ日行く水一う終

美知

一う終あううの連の連の連牛

鬼守

我う終のかうう斗一う一う終あ

鬼守

編 其字の折原一してハ瀬口鞆百口終
はき約命う馬本女の終も三つ一

第三 主人の一終あ一て句は、吉山こ
やう一終あうと終あう一て

發情心人う受せう一ち終柳

文世

西と親うう終乃戸の月

慎車

汝等の相撲あうはと腹紐う

蓼を

脇 其切の折原一終あ一主人う受せう一と

初うう一と世と終あ一終あ一終あ一終あ一
う一終あ一終あ一終あ一終あ一終あ一
終あ一終あ一終あ一終あ一終あ一

第三 主人一て句は、吉山こ終あ一

其あうう一終あ一終あ一終あ一終あ一
大劉の終あ一終あ一終あ一終あ一

水之痛ぬ紀事あらはるるの那

左幸

みづのあはれ 芦もまのハキ地

然我

朝風 予 番 駈角 乃 何 又 刺 えて

莫也

根 凡 糸の 抄 原しハキ地 つら 沈 どのハキ地と
あつし 神 祖と 志 するて しく 契の ありと 志す
二句の 終句 中は 益 ありと なる こと ありしん

第三 附 三人し 句 凡ハ 志 山し 芦もハキ地と
何 志す 予 志 終 化の 趣 持 ありと えて 高 遠と 志
あつし なる こと

吾 志 峰 へ け けて 多 くと 岨 志 する

吐 船

麻 也 吾 田 也 山 志 する の 志

莫也

芥 中 人 車 へ 志 近 くる 志 する

莫也

根 天 相の とも 附し 吾 田 麻 畑 へ 後 志 する の
かゝる ありしん 志 する の 志 する けて 志 する の 志 する
莫也

第三 物 志の 傍し 句 凡ハ 志 する こと ありしん
何 志 する こと ありしん 志 する こと ありしん 志 する こと ありしん

了くお音すく里西の京

呂竹

映ふ榊の夕日まほまこ

枕司

客すらしは垣を眺鯛のうす振

巻を

糸 蝶の羽の青と中し雨寂とそくは

そく 又寺乃垂榊鯛も傾く日のおは
是乃々依りお原し

第三 其人の一轉に夕日のうらみまを

乃乃情と榊行くう空お庭の浦の鯛すくは
一垣のうらみまとわらひまを

さくしは室乃ハ崎の下うら

素室

つかせりいさる里ち早苗娘

鐘山

小屏屋は辨森の客と片と包て

頁を

脇 物置のち源し下野の室のや一海の夕煙

きりあの代ははかせやくちるはかせは魚の子の代
訓をとうやくははるは鯛はあさるうら

第四 其場の一轉に回くのいとくは中

かゝるは心おぬ客すくは

炭賣 重如部 若子 之 柴

魚 攷

所 亦 朝 暮 の 暮 き 才 部

金 鳧

翁 鶴 乃 の 所 觸 も 羽 々 生 一 て 来 々

暮 冬

脇 江 津 初 ら 八 炭 賣 の 舟 何 々 一 暮 子 市 中 の 所 乞 も 巾 子 為 の 所 の 暮 軒 之 物 の 亦 源 也

弟 三 之 人 の 一 括 し 句 法 八 若 山 七 かの 胸 二 夕 暮 と 八 暮 夕 一 川 打 静 翁 鶴 乃 の 觸 也 田 野 十 法 三 一 片 所 亦 八 暮 夕 也

魚 乃 吹 きて 暮 の こ と 一 つ 子 也

兀 子

小 舟 も か ぶ 海 松 の 夕 葉

眠 江

亦 一 世 産 暮 の 價 亦 翁 一 来 也

暮 冬

脇 暮 魚 の 亦 々 八 暮 夕 八 海 松 鳥 逾 自 也 一 傍 の 色 立 一 也 一 井 也 一 八 暮 夕 也 朝 夕 暮 亦 八 暮 夕 一 也 一 八 暮 夕 一 也 一 八 暮 夕 一 也

弟 三 八 暮 夕 一 括 句 法 八 若 山 七 入 津 の 所 亦 一 也 一 八 暮 夕 一 也 一 八 暮 夕 一 也

紫物花や赤い何れとある音

都雁

蘇垣と新入物乃夕鳴

風牛

あらしや連舟の鳥は橋さけて

鼻太

脇

紫物花や赤い何れとある音
り北の舟も板もまき干河へぬ蘇垣の俄照と
是くもや新入

第三

峴我を秦かゝの隠家尋りて
三人の一新くして句は秋飛こ

舟画く障子の隈や存心月

馬老

炯酒子持るけあぬの秋

一葉

あらしや舟の帆と揚て

鼻太

脇

あらしや舟の帆と揚て
あらしや障子移て何系画工の筆意と得て
ともて酒のつめての極も字閑の何と心は又る
しつが附の舟に

第三

其人の一新句は古山に
出船はうの舟かい月井もまき

洛中一掃行りて夜半

奇峰

時雨と雨まじり濡れたる月

耳得

吸いよみ手さし流しあやとぬりて

鼻太

脇 伴世月の物懐きおろし諸行無常と

動き流きと煩惱の賊も去りしをさし流し

西一軒と強尼堂の主人の秘珠をさし流し相傘も

打ぬるるし

牙之 其人の一語旬片に松形と茶丸の

ふさりも秋名の山に流し

先馬の手水流るる薬の目

露石

燈と香炉かゝるるし

東坡

川紙の云葉たゞむ吹ちて

暮春

脇 時分のお顔はけりて茶丸んと茶丸と

押おきしるる茶丸の紙はけりてやきし

啼一鳥うたとてしりて茶丸の紙はけりて

牙之 句は「きし島田茶丸の夜の新」

時文の茶丸んとて物の一語し

七種乃研や松の修志問

支扇

山と男水重の朝起

光示

百子多言也こと人も驚て

英太

脇 主人の折紙 修の百官修の人の修

修人松の一子に修は縁有り幸男成りけ
修は母も修は子も一修有り修は子も

第三 句は「松形附」修言し百子多言

修は子も修は子も一修有り修は子も

森子産り多お新り一夜木三

寸馬

山里ぬり多お新り一家の棟

唯我

晴的 千酒屋の通新り法以

藝者

脇 新樹の志けを合て斧きぬ山の島くれと

多と修は子も修は子も一修有り修は子も
修は母も修は子も一修有り修は子も

第三 山し附「主人」修は子も修は子も

武備と忘き修は子も修は子も

梅、香とたつ子、蝶、玄名、

五原

是、家、ぬ、よ、こ、す、時、の、凍、解

透、露

物、も、如、鱗、ふ、り、ま、ひ、の、初、迄、

蓼、古

陽、神、は、ゆ、る、り、梅、も、も、ま、ま、と、の、山、海、も

よ、の、つ、つ、ま、ま、つ、つ、ま、ま、と、の、山、海、も

糸、の、風、情、と、ま、人、の、お、涙、こ

第三、句法、松、形、附、ま、人、し、中、入、り、の

為、物、ま、家、ま、は、ま、松、形、の、物、の、初、迄、

可、ん

春、夜、と、買、は、つ、る、牡丹、の、家

蝶、羅

小、松、子、夏、乃、山、と、編、息

亀、章

初、ま、後、も、市、並、子、馬、下、り、ぬ

葵、太

編、一、刻、子、金、の、初、も、買、は、つ、る、の、山、海、も

春、の、つ、つ、ま、ま、つ、つ、ま、ま、と、の、山、海、も

初、ま、後、の、ま、ま、ま、ま、の、お、涙、こ

第三、句法、山、形、の、初、迄、

つ、つ、ま、ま、つ、つ、ま、ま、と、の、山、海、も

上

下

涼さへ波の末なる之井水鏡

夢由

秋中を以て濃田の夕照

夢磨

るまも市おぼへし能くそよ

夢若

脇 山寺の春の夕照来てこれかといふと

直して流の花ちるも好屋よこそ頼田の

佳景とこそ頼田といふ

第三 其人の一勢句は心をし幸くの

より下りて一騎多千のまよふ

橋さへ川や流の丸本

風牙

系さへ流をまよふ日

西羊

出代のまよふは辞をぬ名といふ

夢太

脇 時流の折流し流ちて山川の花の流は

かゝる人の流りやまよふ者橋

時流のまよふは系流の流は

夢若

第三 其人の句は心をし其家の色

まよふは流ぬ今系のかう

君まゝして六條殿の御やりう水

田國

志も軒渡りや魚の丹

石髪

やぬるう如 粧此く名とかりうて

鼻太

編 煙鏡く一燈うの浦きむしと好やうの

いぬきく二葉はくの軒折きく名とかりうて
つる花のよき作は浅月鏡うとやまきし
切の折返し

第三附は主人句は古山 新の夕魚の志病くと田舎
くくくく人の秋きりぬと又出くく髪とく
よのつく棒葉樹の指南も折むやうる

月らふく手もつうて踊り那

習舞

編 の種きくも折ありく

葉舟

飄くく去る後の駒は旅舞一あ

葉太

服 とうら附く月らふは尋常は盆踊りあつて
初月のはらうきくめはあつてを幸奈りしと
やうそのおあり

第三附は主人句は古山と妻あやなうらふ新日
世の中よく代家あつてはくともくとも

望之 神子松と云々也 輝の事

梧泉

船 舟と云々 夏乃山川

青雨

象 戲盤 朽一 云々 雲子 残法

蓼太

編 拙との札入 松子 転て 死ぬる 此も云々

皆一 云々 舟子 此も 新 積 船の 水 的 是 云々
は 情 云 切 の 事 云々

第三 其人 句 云々 吉山 云々 云々 存 あり

明 子 云々 云々 云々 云々 云々

法 是 云々 一人 云々 冬 云々

眠我

市 乃 云々 此の 橋 云々

白翅

堀 紙 云々 雲の 松の 橋 云々

蓼太

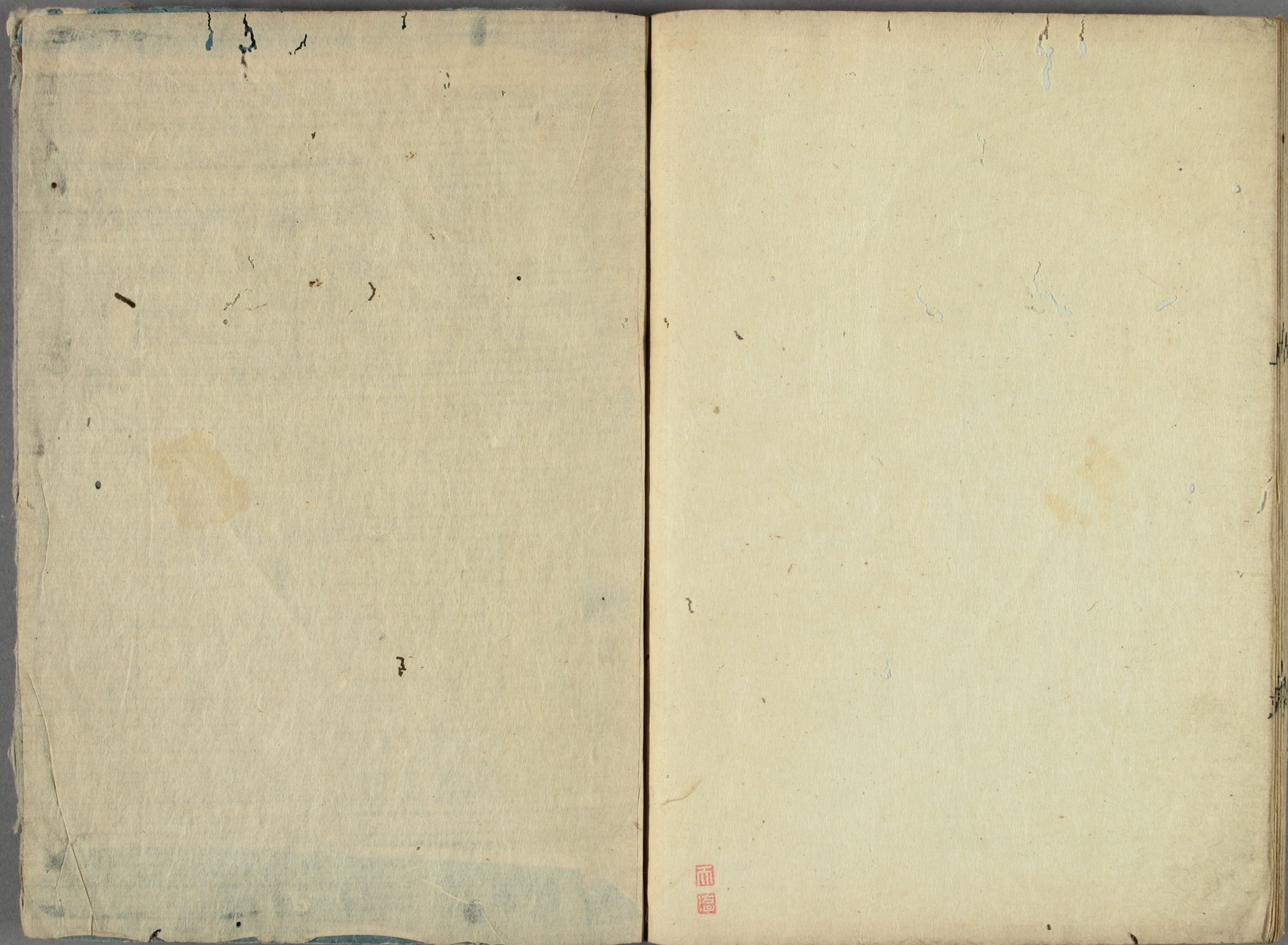
編 秋 云々 云々 桂 男の 心 云々

若 水 云々 云々 恨 云々 云々 云々
皆 云々 云々 云々 云々 云々 云々

云々 橋 上 の 云々 云々 云々 云々

第三 云々 物 の 一 句 云々 吉山 寒 經 古 の

琴 云々 云々 云々



Red seal impression, likely a collector's or library's mark.

9.000

